

海舟遊覽圖
 凡遊者必
 烟台觀海
 古名曰三
 毛或謂之
 海之東門
 俗稱海門
 水於此觀
 觀之者必
 齊人



森 銑三
野間光辰
中村幸彦
朝倉治彦
編

隨筆百花苑

第七卷

中央公論社

隨筆百花苑 第七卷

定價 二八〇〇圓

昭和五十五年五月十日印刷
昭和五十五年五月二十日發行

編者 森 銑三
野間 光辰
中村 幸彦

朝倉 治彦

發行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

發行所

中央公論社

東京都中央區京橋二一八一七

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九八〇 檢印廢止

隨筆百花苑

第七卷

目次

敍言

朝倉治彦

凡例

浪花見聞雜話

一三

假寢の夢

諏訪頼武

五一

思ひ出草

池田定常

一〇五

南蘭草

池田定常

三三

無可有郷

鈴木桃野

三七三

酔桃庵雜筆

鈴木桃野

四〇七

桃野隨筆

鈴木桃野

四二九

解題

四五五

敍言

朝倉治彦

『隨筆百花苑』第七卷は、「風俗世相篇一」として、隨筆七篇を收録した。全て、これまで名は知られながら、中には、若干引用紹介されたものもあるが、完全なる翻刻が行われなかったものである。

七篇のうち、一篇は著者不明であるが、あと六篇は諏訪頼武（一篇）、池田冠山（二篇）、鈴木桃野（三篇）であり、この三人は、いずれも上流の武士であり、特に池田、鈴木 の二氏は、名の知れた文人である。

池田冠山は著書の極めて多い人であるが、そのうちの漢文隨筆『護法漫筆』を除く、二隨筆を本卷に収めたこと、また鈴木桃野は、既翻刻の『反古の裏書』以外に、残る隨筆三篇を収めたこと、この冠山、桃野資料の提供は、讀書の興味を惹くと考えられる。

地域的には、江戸を中心に上方一篇を加えた編集のもとに、江戸中期の風俗世相を伝える隨筆を収めたものであるが、かかる隨筆の性質上、學藝に關する見解などにわたる隨想的なものも若干含まれてい

る。

『浪花見聞雜話』一卷、收むるところ一七一條、ほとんどが短文である。排列は必ずしも年代を追わず、氣ままに書きとめたものであろう。場所は、書名にある通り大阪である。内容は、藝能關係が多い。著者は、服裝の變遷にはあまり興味を持たなかったらしく少ない。また天然自然にも注意はひかれず、専ら町中の奇事を喜んだものと推測される。

『假寢の夢』上下二卷、その説話の排列に統一はないが、執筆規準は大凡武にあるように伺える。しかし、文藝藝能にもたしなみあるを知らしめる記事も少なくない。錦畫の巨川・莎鷄の記事の如きは、他になき好資料であることは、森銑三翁も紹介しておられる。竹村悔齋の最後、悔齋に殺されし津村の情人のこと、狸、女の化物、化物振舞、赤合羽の乞食、兩國の射的、一服一錢、風鈴そば、山男などの興味ある話題を拾うことができる。

池田冠山の『思ひ出草』正續八卷は、收むる説話二四五篇である。排列には、特に標準は見うけられない。致仕してより氣輕に市中にも出た冠山ではあるが、本書かしこまって、くだけたところ乏しいものの、好學の一大名の執意性情を伺うに足るものであり、祖先、交友、外出のことなど、知られざりし事實は少なくない。また焼亡せし隨筆のことなども本書を以てはじめて知る知識である。郷國のこと、江戸との比較にも及べる箇所、經驗せしかつての風俗、則ち菓子、松井源水、金神除、釋典の料理、冠山の好惡、淺草雷門横の飴おこし、池袋の稻妻路、北澤の牡丹、洲崎の日の出、板橋の縁切榎、傳通院

の無聲蛙、あるいは武鑑の訂正のことなど拾うことができ、文學上のうち、交友の事蹟なども好學大名の生活の一端を知らしめる。

同じく冠山の『南蘭草』上下二巻、全て短文、配列一定ならざるは、思いのままの隨記のためである。前書に濃く見える倫理的なる色彩はほとんど失せている。淺草寺の專當に對する考えは、前書に詳記されているが、重複はこのほかにもなお存する。大體言語に關する冠山の平生からの注意を見せたもので、現在から見れば、極めて幼稚なる解釋もあるが、これも、當代の知識人のレベルを示すものと解すべきである。言葉の民俗ともいうべきものも含んでいる。

鈴木桃野の『無可有郷』上中下三巻は二十六條、書畫のこと多く、中にも書の變移、儒者の書、詩社の鬪詩、藝能、浮世繪品評、棄犬、若年時の環境など當時の風俗を拾うことができよう。

『酔桃庵雜筆』上下二巻、記するところ、わずか十章。本書は前書より一層具體的で、しかも、おかしみのある見聞の話柄から成り、世情推察の料となるであろう。

『桃野隨筆』は一巻、述べるところ五十條、性格の異なる條が卷首にあるは、稿本のままなるを拾集したためであろう。『無可有郷』成書のための隨録の一つではあるまいか。

凡例

- 一、収録にあたって、作品の配列は成立年順とした。
- 一、本文については、それぞれ信頼しうる善本によって校訂し、疑点については他本を参照するなどして補正に努めた。
- 一、漢字は正字體を使用し、古字、別體字、俗字などは通行の字體に改めたが、底本の字形をそのまま残す必要のある文字はそのままとした。
- 一、底本に句讀點は施されていないが、読み易いように適宜これを施した。また漢文の句讀點、返り點、連字符についても必要に応じて補ったものもある。
- 一、原則として送り假名、振り假名は底本のままとしたが、濁點は、読み易いようにこれを補った。但し時代的な特殊表記はこの限りではない。
- 一、假名の古體、變體、合字などは通行の字體に改めたが、平假名、片假名の別は底本通りとした。
- 一、原則として脱字、衍字、誤字、宛字は底本通りとしたが、その作品の特殊性を考え、固有名詞や明らかな誤字などは訂正するか、または行間に正しい字を（ ）で添え、不明の場合は（ママ）とした。本文中の校訂者による注記は「」で示し、本文と區別した。

一、底本の蟲喰い、破れ、汚れなどで判讀不可能の場合は、推定字數だけ□□を重ねて行間に注記し、推定可能の場合は、行間にその文字を示した。

一、底本に改行のない場合は必要に応じて改行した。

一、底本の簡単な書入れや注は本文の該當箇所（へ）として挿入し、數行にわたる場合には、その該當箇所の行間に和數字を付し、その段落の終りに掲出した。

一、各卷に「解題」を付し、作品及び著者の解説、校訂上の注意事項などを記した。

風俗世相篇一

責任編集
朝倉治彦

浪花見聞雜話

